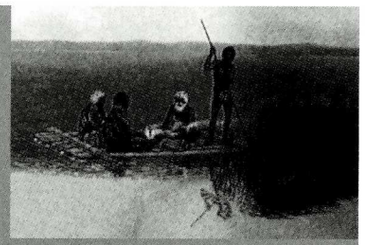
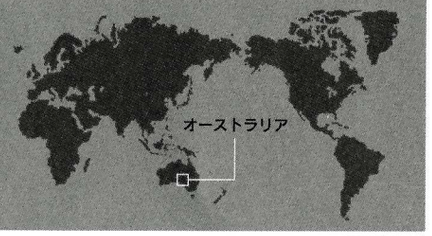
民博ビデオテーク番組「ングルンデリ神話」
（番組番号1602）



地球を集める

ングルンデリの神話

松山 利夫（まつやま としお）
本館民族社会研究部



南オーストラリア州を流れ下るマレー河には、興味深い神話がある。この地方に暮らしてきたアボリジナルの集団ンガリンジェリの人びとは、それを次のように語りついできた。

語りつがれる神話

逃げ出した二人の妻を追って、ングルンデリは樹皮のカヌーで小川を下っていた。カヌーのさきを巨大な魚マレーコッドが泳いでいた。マレーコッドは大きな尾ひれで水を押しわけ、川幅を広げた。やがて魚は湖に泳ぎ出た。魚を見失って途方に暮れたングルンデリは妻の兄弟ネベルのことを思い出し、崖に座っているネベルを呼んだ。

二人はマレーコッドをとらえるとその肉を細かく刻み、ひとつひとつに魚の名をあたえながら肉片を湖に投げ込んだ。こうしてマレー河とその下流にある湖アレキサンドリア湖には多くの魚がすむようになった。

ングルンデリはまた旅を続けた。そのころ彼の二人の妻は、女性には食用が禁じられていたコイの仲間の魚を焼いて食べようとしていた。臭いを嗅ぎつけたングルンデリは、妻たちのところへ向かった。その途次、もういらなくなったカヌーを彼が天に押し付けると、舟は天の河になった。一方、ングルンデリが追ってくるのを察知した妻たちは、クーロング半島へと逃げ、カンガルー島へと渡ろうとしていた。

ングルンデリはクーロング半島で悪意に満ちた呪術師と戦って勝利し、ようやくエンカウンター湾の岸にたどり着くと妻たちの笑い声を聞きつけ、その方向に棍棒を投げ付けた。それは海に突き出た小山になった。

エンカウンター湾の潮が引きはじめたある日、ングルンデリは二人の妻が歩いてカンガルー島へ渡るのを見つけた。彼は雷のような声で叫んだ。「落ちろ！水のなかに落ちろ！」。見る間に潮が満ち、妻たちはおぼれ死んだ。

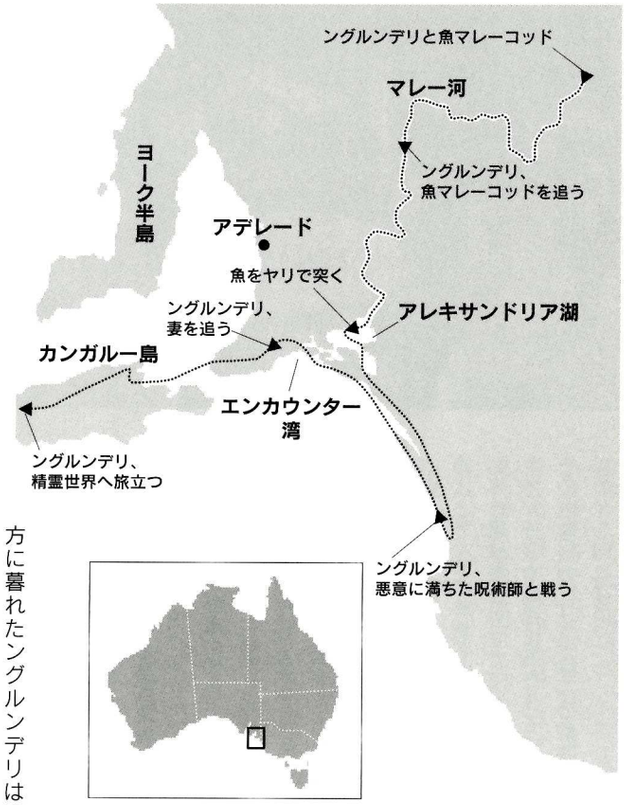
カンガルー島に渡ったングルンデリは、島の西側でヤリを海に投げ捨てて体を海水で洗うと、天へと昇り天の河に輝く星になった。彼は人びとに告げた。「お前たちが死んだら、お前たちの魂はわたしが作ったこの道をたどることになる。そして天に昇り精霊の世界でわたしと暮らすのだ」と。

資源の保証、幸せの保証

マレー河の河口に暮らしてきたンガリンジェリの人たちは、ほぼこうした内容の神話を語りついできた。それはマレー河の起こりと彼らが漁の対象にしてきた多数の魚の起源、天の河の形成、そして死後の魂の行き先を説明する。それゆえに彼らは、この神話を現代にまで語りつがなければならなかった。つまり、豊かな漁業資源が保証されていることの意味と夜ごとに仰ぎ見る天の河の由来、そして死後の魂が精霊ングルンデリとともにあることについての幸せな保証を、日々に語り次世代に引き渡す必要があった。

精霊の足跡を追う映像

植民地の圧力が強く、早くから都市アデレードに出ざるをえなかったンガリンジェリの人びとのこの神話を、年長者の協力をえて映像に納めたのが、本館のビデオテーク番組「ングルンデリ神話―南オーストラリア博物館の展示から」である。そのきっかけになったのが、一九九六年当時、南オーストラリア博物館に展示されていたングルンデリの神話を再現したジオラマ（立体模型）であった。展示の紹介にはじまるこの番組は、マレー河に集うペリカンをカメラに納め、今も少数のンガリンジェリの人たちが暮らすラウカン・コミュニティを訪問し、アシのあいだからアレキサンドリア湖の水面を写し、クーロングの砂だらけの道を行き、エンカウンター湾にングルンデリの足跡をたずねて構成した。これもまた標本資料に優るとも劣らない「地球を集める」ことなのである。



精霊ングルンデリの旅の道すじ
（南オーストラリア博物館1989年の解説パンフレットによる）